

“逃げない啓光ラグビー精神”抱き 世界へ羽ばたきたい



グローバルなビジネスを展開する伊藤忠商事。人事部に所属する藤代尚彦さんは、「商社業界のトップを狙える企業で、いずれは海外を舞台に活躍したい」と夢を語ります。その胸には、啓光学園中学・高校ラグビー部ではぐまれた自信と“決して逃げないスピリット”が燃えています。

■目指すのはNo.1

どこかあどけなさの残るフレッシュな表情。柔らかな物腰ながらも、「何をやるにもトップを狙いたい」と闘志をのぞかせます。この4月で社会人2年目を迎える藤代さんは、世界中でビジネスを手掛ける総合商社、伊藤忠商事の社員です。

「祖父がアパレル業界にいたため、日本の繊維産業を引っ張ってきた伊藤忠商事に興味を持ちました。繊維だけでなく、たくさんの分野で世界を舞台に仕事をしていることや、就職活動の時にOB訪

問でお会いした先輩社員の活力あふれる姿も魅力的でした」。入社後は人事部に配属となり、主に会社説明会の開催や採用担当のホームページ運営などを手掛けています。入社式など新入社員の受け入れ準備をしている今は多忙な時期です。「商社は華やかなイメージを持たれがちですが、実際は泥臭い面の方が多いです。しっかり仕事内容を理解して入社してもらえるよう、丁寧に説明しています。厳しい状況でも、踏ん張れる人材がほしいですから」

そのためには、まず自分自身が事業内容を把握しておくことが重要です。とはいえ、伊藤忠商事は約400社、従業員5万人超で構成されるグループカンパニーの中心。繊維をはじめ、エネルギー、機械、情報通信、化学品、食料、金融といった、あらゆる分野にネットワークを持ち、情報収集だけで一苦労です。社会情勢などについて見聞を広げることも欠かせません。「企業の顔となる部署ですから、学生たちに説明をしていると、自然と力が入ります。中学・高校時代、『どこで誰に見られても啓光学園の名に恥じない振る舞いをするように』と、口を酸っぱくして指導してくれた、ラグビー部の杉本監督の言葉を思い出します」

■小さな集団が大きな力で立ち向かう

啓光学園中学(現・常翔啓光学園中学)を受験したのは、6歳から始めた少年ラグビーに熱中していたから。「どうせやるなら、日本一を狙える学校がいい」と、学業との両立を両親に約束し、入学しました。西宮の自宅からの通学途中でよく友人と会い、仲良く語らいながら枚方のキャンパスへ。「啓光の一員になれたうれしさ」で、長い通学時間を苦に思うことも無かったと言います。

グラウンドで見かける高校生部員たちにあこがれのまなざしを向けつつ、レギュラー獲得を目指して練習に励む毎日。ポジションはスクラムハーフ。最前線のフォワードから後方のバックスヘイの状態ボールを渡せるよう、常に周囲の状況を見てつなぐ、コミュニケーション力が必要な位置です。

「啓光学園は小柄な選手が多く、強そうには見えないけれど、気持ちで当たり負けしない。身体能力が低い分、それを努力でカバーし、戦術を駆使して、自分たちより能力が上のチームに立ち向かっていく。逃げない啓光ラグビーが好きでしたね」。中学3年では近畿大会の優勝に貢献。幼いころからの夢であった、高校ラグビーの扉を開きました。

interview - 04

藤代 尚彦さん

伊藤忠商事 東京本社 人事部

ふじしろ・なおひこ ●2006年3月啓光学園高校(現・常翔啓光学園高校)卒。2010年3月慶應義塾大環境情報学部卒。同年4月伊藤忠商事入社。兵庫県出身。23歳。

■負けた悔しさが次への原動力

しかし、4年連続全国大会優勝という先輩たちの偉業を引き継いだ藤代さんたちの代は、ほろ苦い思い出とともに高校ラグビーの幕を閉じます。2005年度の第85回全国高校ラグビー大会で、啓光学園高校は全力を出しながらも、準々決勝で大阪工大高校(現・常翔学園高校)に惜敗。積年のライバルであり、後のグループ校となる両校の忘れられない一戦となりました。

藤代さんが大切にしている1枚の写真には、当時の仲間たちの姿があります。チームメイトと肩を組み、カメラに笑顔を向ける少年たち。やんちゃな瞳の奥には、うっすら光る涙のにじんだ跡があります。「負けた悔しさを忘れたくなくて、この写真をずっと部屋に飾っています。大学では必ず日本一になる、そう誓っていました」

大学は「ラグビーを続けながら、社会人になった時の選択肢も広げられるよう勉強しておこう」と、慶應義塾大環境情報学部に進学。環境問題やIT、スポーツ科学など幅広いカリキュラムの中で、競技において選手のパフォーマンスを向上させるための方法論である「ピークパフォーマンス」などを中心に学びました。「勉強にも励みましたが、やはり大学4年間もラグビー中心でしたね(笑)。慶應は啓光と同じで、体格は小さくても逃げないラグビーが身上なんです。ラグビーのエリート選手を集めた大学に勝った時は、本当にうれしかったですね」

時には試合で他大学のレギュラーとなった高校時代のチームメイトと再会することも。ゲーム終了後は抱き合って健闘をたたえ合ったそうです。このように、ゲーム終了後に敵味方関係なく尊敬し合える「ノーサイドの精神」も、藤代さんにとって大切な財産になっています。

■未来に向けてコツコツ土台づくり

そして社会人となった今は、フィールドを変えて新たな土台づくりの最中です。覚えること、やるべきことが山積みで、「文書作成の仕方など、基礎的な能力が身につけてきたことに小さな手応えを感じている状態です。業務を通じて1つの大きな達成感を得られるようになるのは、まだまだ先でしょうね」

そう話しつつも、仕事とラグビーは似ていると感じることもあるといいます。「1つの試合に勝つためには、1年間必死で練習しなくてはならないですよね。勝って初めて報われるわけで、基本的にはつらい練習の時間の方が長い。仕事も同じで、努力の積み重ねがあ



学生最後の試合となった東海大戦



高校ラグビー部引退時の宿泊先での集合写真

るから、1つの成功が大きな喜びになるのだと思います」

そういう意味では、たとえ直接的な業務に関係しなくても、ラグビーを通じて知った、努力することの大切さや団結心は生きてくるもの。「80分間のゲームであれだけ頑張れたのだから、もっとやれるはず」という自信が、藤代さんの支えとなっています。

■一人ひとりの力が商社の財産

メーカーと違って自社製品を持たない商社の財産は、“人”。社員がどれだけ頑張れるかによって、その企業の成長や評価が決まるため、常に自分を磨き続けることが大切です。とりわけ海外プロジェクトも多彩に展開する伊藤忠商事では、努力すればする分だけ、将来活躍できるフィールドも広がります。「自分から動き出すことで10年~20年後に差がつく」と考え、自己啓発に努めているそうです。

「後輩の皆さんも、中学から高校、大学まで時間はあるので、学生生活を有効に使ってほしいと思いますね。やりたいことを一生懸命やって、必要なことをその時その時でしっかりやっていけば、後々、自分の強みになります」

今は海外を舞台に活躍することを目標に語学力を強化中。人生のトライを目指し、今日も疾走しています。

